目次

第一章　江戸にラクダがやって来た……1

一　江戸はラクダで大騒ぎ……2

どのようにラクダと接したか／到着地、板橋へも人が殺到／
紀州藩主と平戸藩主の明暗／迎賓館赤坂離宮と赤坂御用地／
感染症流行の時代／絶妙のタイミング／ラクダから逃げ出す疫病神／
元気な十方庵の記録からわかること／「ラクダ現象」の広がり／
『武江年表』の誤りと、資料の扱いについて

二　長崎舶来から江戸に至るまで……27

長崎にとどまり続けるラクダ／ラクダの情報で遊ぶ江戸の狂歌師たち／
ラクダが出島を去るまで／大坂にラクダがやって来た／
大坂の唐物屋が売り出していたラクダ絵図／
なかなか始まらない難波新地の見世物／大坂でも大当たり／大坂から京へ／
ラクダを描く画家たち／雌雄仲むつまじいラクダは「夫婦」に／
流行唄のラクダは「よれつもつれつ夫婦連れ」／「土瓶の鋳掛」から「駱駝」へ／

文人たちの「仲よしラクダ現象」――頼山陽と梁川星巌／
さらに語られ、描かれるラクダ／
伊勢を経て、中山道から江戸へ／ラクダは「紀州様の荷」

三　『駱駝之図』を読む ……84
絵柄を読む／唐人姿の男たち／口上記文を読む／中国的認識枠と西洋知識／
ラクダのコブはむずかしい／「天竺カテゴリー」とハルシヤ、アラビア／
誇張されるラクダの能力／盛りだくさんの「ご利益」／
ラクダと七福神とのコラボ／『和合駱駝之世界』／ラクダ研究書の世界／
1　堤它山『橐駝考』／2　大槻玄沢『橐駝訳説』／3　松本胤親『橐駝纂説』／
4　山崎美成『駝薈』／江戸の「ラクダ現象」をめぐって

四　ラクダの旅路 ……140
水海道でのトラブル、そして八王子、大田原（文政八年）／
金沢、鯖江を経て名古屋へと向かう（文政九年）／
ついに名古屋にラクダがやって来た（文政九年十一月）／
『絵本駱駝具誌』が再現する世界／
二度目はうまくいかず備前から徳島へ（文政十年）／
中国地方をめぐる旅――広島、岩国、天神渡、津山（文政十一年）／
謎の空白を経て若狭小浜に（天保三年）／江戸再来と信州飯田（天保四年）／
ラクダの行方／ラクダの到来と異国・自国の形象

五　落語『らくだ』の時代……176
落語『らくだ』の概要／ラクダ見世物と「かんかんのう」／同時代文化が交響する落語／『らくだ』のパフォーマンス

第二章　舶来動物と見世物……197

一　動物舶来の歴史……200
古代の動向／クジャクとオウム／舶来動物と「ご利益」／中世の動向／朝鮮のタカ／近世の動向／多数を占める鳥類／かぎられた享受者たち

二　舶来動物の見世物……215
見世物の揺籃期／商業化が進んだ江戸時代後期

三　そこで何が起こっているのか……219
珍しい動物の「ご利益」／生餌の演出／勢州松坂　鳥屋熊吉／議論の行方

第三章　開国期における異国・自国の形象……229

一　異国船はやって来る……231
オランダと中国が混淆する異国船／「来航する」という形式

二　ペリー来航と日米のレプリゼンテーション……236
西洋世界の地球的拡大とペリーの「砲艦外交」／日米のレプリゼンテーション
三　不気味な異国人物、そして「神風」「神国」……243
異形の異国人物たち／「神風」が異国船を吹き戻す／非対称性の別次元からの解消／「神国」では異国のトラも日本語を覚える／「神風」の遊廓
第四章　日本人になってみる、日本をやってみる……257
——身体が形象するジャポニスム
一　日本人になってみる……260
あたしたち日本人になっちゃった／「日本人になってみる」コスプレの系譜
二　日本をやってみる——「茶店・茶屋」と「茶屋の娘」たち……265
プラハのYOKOHAMA／チェコのジャポニスムを牽引したホロウハ
三　ホロウハの行動的ジャポニスム……269
『嵐のなかのサクラ』と最初の日本滞在／二十代後半での「茶店・茶屋」の実現／『日本の子どもの昔ばなし』

四　「実物の日本人」と出会う……274
日本の軽業曲芸師たち
五　ジャポニスムの源泉としての軽業曲芸師……277
最初の旅券の集団／「子どもたちは例の日本人を見てきた」
六　「芸者」と「ゲイシャ」の相乗……285
万国博覧会と「日本村」／オペレッタ『ゲイシャ』に烏森芸者が出演／ドレスデンの芸者とプラハの「茶屋の娘」たち
第五章　横浜が売る「ニッポン」――サムライ商会を中心に……291
一　サムライ商会の「ニッポン」……294
強烈な日本趣味の外観／骨董と美術工芸品の製造――サムライ商会の内部から／日本趣味のシルバーウェア／再創造・再生産される「ニッポン」
二　野村洋三をめぐる人びと――獅子文六、そして新渡戸稲造と鈴木大拙……306
作家、獅子文六の父親のシルク・ストア／新渡戸稲造の武士道に呼応して／鈴木大拙との交流／Bushidoと Zenの背後にあるもの

注……315
主要参考資料……343
初出一覧……357
あとがき……359

第一章

江戸にラクダがやって来た

一　江戸はラクダで大騒ぎ

文政七年（一八二四）閏八月九日、江戸きっての盛り場であった両国広小路でラクダの見世物が始まった。

雄一頭、雌一頭のヒトコブラクダ二頭の番いであり、オランダ船に積まれて文政四年（一八二一）七月二日に長崎に舶来し、そこから三年余りの時を経て江戸へやって来たものである。皆が待ちこがれたラクダであり、江戸中の人びとが両国橋西詰の小屋へ押し掛け、見世物は大ヒットとなった。

ラクダは古来、日本へ何度か舶来していて、江戸時代にもすでに二度やって来てはいた。しかし、正保三年（一六四六）に長崎舶来のラクダは三代将軍、徳川家光への献上品で見世物として庶民に供覧されることがなく、また、享和三年（一八〇三）に長崎舶来のラクダは交易を許されていないアメリカ船が運んで来たもので戻されていた。[1] つまり、当時の江戸庶民にとってみれば、文字通り生まれてはじめて、ラクダなる「異国の珍獣」を目の当たりにしたわけであり、動物園やメディアを通じてラクダを知る今日のわれわれとは状況がまったく異なっている。不思議な背上のコブの形状といい、独特のおっとりとした感じの顔立ちといい、未知の異国にはこんな動物がいるのかと驚異の目を見張ったことだろう。両国の見世物小屋で間近にラクダと接する体験は、多くの人びとにとって一生の語り草

となったにちがいない。

どのようにラクダと接したか

ラクダの話題は当然、同時代の随筆や記録にさまざまなかたちで記された。

あちこち出歩くのが大好きで数多くの「遊歴」の記録を残してくれた隠居僧、十方庵敬順は、「武江両国の広小路に於て、駱駝といえる怪獣の牡牝弐疋を見せものにし、広き東武中一円の評判なれば、朝より暮にいたるまで見物の人山をなして、栄当〳〵と込合事仰山にて、或日は五千余人に及べるとぞ」と記し、日々、人が山をなして「争ひ見る」状態であったと証言する(『遊歴雑記』)。一日に「五千余人」の観客という数字は当時にあって驚くべきものだが、大衆的流行現象が頻繁に現出するようになっていた十九世紀の百万都市江戸では、こうした規模の見世物が他にも何度かおこなわれており、実態を反映する数字ととらえるべきである。(2)

間近にラクダと接する体験と記した通り、この熱気の見世物小屋のなかで、人びとはまさに間近に、身近に、ラクダと接することができた。小屋内では太鼓や横笛、トライアングルを鳴らす風変わりな唐人姿の男たち(実際には日本人)が、観客のすぐ目の前で二頭のラクダを連れて回り、さらに、札銭(入場料)の三十二文とは別に四文、八文といった代価をとって大根や薩摩芋、茄子を買わせて、それを観客が手ずからラクダに与えることがおこなわれたのである。ペットへの餌やり同様、これは動物と人間との最も親しき交わりの一つといえるだろう。

ラクダに「間近に、身近に」接したと筆者が強調しても、もしかすると実感がわかない読者もいる

図1　ラクダに見とれる観客たち．名古屋大須での見世物小屋内を描く（高力猿猴庵『絵本駱駝具誌』写本より，部分図，名古屋市博物館蔵）

かもしれない。「ラクダに見とれる観客の姿」などといった都合のいい絵は江戸には残っていないが、じつは驚くべきことに、全国でも名古屋のものだけは残っているのである。はじめにまず見世物小屋の状況を実感していただくために、先駆けてその図を掲載しておく（図1）。これは名古屋の文筆家、画家で尾張藩士の高力猿猴庵（こうりきえんこうあん）（種信）が著した『絵本駱駝具誌（えほんらくだぐし）』に掲載の、名古屋大須の見世物小屋での文政九年の光景だが、ここ江戸の見世物小屋でも同様の光景が出現していたのである。同書には「江戸にては見物をも乗せし由なり」と記されていて、江戸では実際に乗せた可能性もある。なお、この資料が記す名古屋の興行に関しては、のちに詳しくふれる。ここではもう一

つ、江戸で出版された合巻（合冊形式の絵入り小説）に見世物小屋前に群集する人びとを描く挿図があり、文芸作ながら随筆記録類に記されるのと同じ感触を描くものなので、あわせて掲載しておく（図2）。この作品に関しても、のちに詳しくふれる。

さて当時においては、ラクダのような舶来の「異国の珍獣」には、神仏のごとき「ご利益」があるとされており、ラクダは西方からやって来た有り難い「霊獣」「聖獣」であった。最もよくいわれたのは疱瘡麻疹除け、悪病除けの効能であり、見世物小屋では故事いわれを付してラクダの毛を包んだお守りが売られた。そんな馬鹿なと思うかもしれないが、当時は実際にラクダが感染症や悪病からわが身を守ってくれる、たとえ病気に罹っても軽く済ませてくれるといわれたのである。その意味でラクダを見ることは「ご利益」つきの「眼福」であり、ラクダの毛をお守りとして身近にすればさらに効能が高まるというわけであった。

見世物小屋では、ラクダを描いた墨一色摺りの絵番付や色摺りの浮世絵（錦絵）が販売されており、人びとは人生初のラクダ体験の記念にそれらをもとめ、あとあとまで記憶を反芻することができた。また、まだ見ていない

図2　ラクダの見世物小屋前に群集する人びと（江南亭唐立作，歌川国安画の合巻『和合駱駝之世界』より，筆者蔵．掲載書は人の口などにいたずら書きがされている）

人に絵を見せて、評判を語ったり、見物をすすめたりすることもできた。前述の十方庵は、「壱人鐚三十弐穴[三十二文]をとりて見する上に、絵図を鬻ぎ、なを彼が食物を商ふ事若干[かなりの数量]なれば、目論し者どもは嘸や過分の利潤を得たるなるべし」と観察している。

到着地、板橋へも人が殺到

じつはラクダは長崎で長く留め置かれたすえに、前年の文政六年(一八二三)に興行関係者の手に渡り、大坂、京、伊勢などでまず興行ののちに中山道経由で江戸へはやって来た。最初の長崎舶来の情報をはじめ、その後の動静もうわさとして伝わっており、江戸では今か今かと首を長くして待ち望んだラクダであった。本書の書名で章題でもある「江戸にラクダがやって来た」というタイトルにはその感覚がこめられていて、実際、江戸到着の入口となった板橋からして、すでに大騒ぎとなっていたことが知られている。

こちらの証言者は、元は下級武士から医者となりこの時期ちょうど板橋宿に住んで手習いの師匠でもあった加藤曳尾庵であり、次のように記す。「[ラクダは]木曾路を経て江戸へ来る。其沙汰夥しく、当駅[板橋宿]の豊田市右衛門の主しの家をかりて一日逗留する事になん有りけり。このへんはいふにおよばず、江戸よりゑん類、親るい見物せんとて雲かすみごとくきたる。閏八月四日着のところ、途中に故障の事ありて五日のゆふかた着しぬ。豊田氏の奥庭へひきゐれて諸人に見物をさせけり」(『我衣』)。これはいってみれば現場からの実況報告で、ちょっとした縁程度の物見高い連中が、少しでも早くラクダを見たいと雲霞のごとく板橋まで押し掛け、その甲斐あってか、板橋宿平尾の脇本陣、平

尾の名主である豊田家の奥庭において、いわば「抜け駆け」でラクダを見物することができたのであった。曳尾庵自身もきわめて身近にラクダとのふれ合いを楽しんでいて、「さすりてみるに毛せんなどへさわるよふなり」と、体毛のさわり心地まで記している。

すでに冒頭でふれ、曳尾庵も以下に続けて記すように、見世物興行としては「閏八月九日より両国広小路におゐてみせる。見物群集雲の如し」となるわけだが、ラクダを一目見たかったのは庶民だけではなく、武士身分の者も例外ではなかった。高位でない武士は、地方からやって来て江戸在勤中の勤番侍を含め、両国や浅草の盛り場で見世物見物をしている事例がさまざま確認できるが、ところが身分が高くなると、そうはいかなかった。

紀州藩主と平戸藩主の明暗

ラクダを一目見たい、しかし如何せん、そうもいかないという気の毒な例は、平戸藩九代藩主にして諸学問に通じた松浦静山で、当時すでに致仕して隠居の身ながら立場上ままならなかったようだ。静山の随筆『甲子夜話』には「今遠来の物[ラクダのこと]、予も視たく思へども、流石、卑賤混騒の中にも雑はりかねる故、儒生蒲生亮をして視せしめし」(巻五十三)と記し、結局、人をつかわして見物させ報告を受けている。

『甲子夜話』にはこの記事に先立ち、文政四年の長崎へのラクダ舶来、並びにそれ以前の享和三年にアメリカ船が運んで来て戻されたラクダの一件も載り(巻八)、また今回舶来の翌文政五年に両国にあらわれた「作り物」のラクダ模造見世物の話まで載っていて、「真物はやがて御当地に来るなり」

といった伝聞も記されている(巻九)。この後もさらに二つの補足記事を記しており(巻五十六、巻六十)、静山は好奇心いっぱいに情報を把握し続けていたのであり、何とも残念なことであったろう。

なお、模造見世物の関連でいうと、大坂でも本物の興行に先駆けて籠細工でつくったラクダ見世物が同じ文政五年にあらわれ、また文政六年の本物の興行の寸前にも拵えものの細工があらわれており、さらには、ラクダ到来を江戸よりもっと待たされた名古屋でも、本物の興行の前年である文政八年に羽根細工でつくったラクダ見世物があらわれている。ラクダのうわさが世に広まるなか、ラクダへの期待が各地で高まっていった状況がそこからはとてもよくうかがえる。

知識や情報をまめに蓄積していたにもかかわらず、直接の「眼福」は得ることができなかった松浦静山がいる一方で、抜きん出た特権によって、ラクダを逸早く見ることができた者もいた。徳川御三家、紀州藩十一代藩主の徳川斉順である。ちなみに斉順は時の十一代将軍、徳川家斉の七男であり、後代のことになるが、斉順が没した直後に生まれた子はのち十四代将軍、徳川家茂となっている。

文政七年(一八二四)閏八月十九日、当時二十四歳で紀州藩主となってまだ三カ月の徳川斉順は、広大な江戸藩邸(赤坂邸)の赤坂御本殿においてラクダを見る「眼福」を得た。注目すべきは、この閏八月十九日とは両国広小路で興行が始まってわずか十日後の、日々、人が山をなして「争ひ見る」状態の真っ最中であり、その両国の小屋を休ませて赤坂邸へ呼び寄せたことになる。「閏八月十九日、駱駝二頭御親覧アリ。畢テ、青山御殿へ率カセ、修理大夫様御覧」(『南紀徳川史』)と記録されていて、斉順の赤坂御本殿での「御親覧」後に、さらに青山御殿へとラクダを牽かせ、修理大夫すなわち頼興(先代藩主、治宝の叔父)も見物した。頼興は翌文政八年正月に七十四歳で亡くなっており、ラクダはい

うなれば名残の「眼福」ともなった。

迎賓館赤坂離宮と赤坂御用地

紀州徳川家の赤坂邸とは、およそ現在の迎賓館赤坂離宮と赤坂御用地とをひと続きに合わせた広大なエリアである。江戸時代末期につくられた『紀州徳川家赤坂邸全図』(宮内庁公文書館蔵)を見ると、赤坂御本殿は東北側一帯の迎賓館赤坂離宮とほぼ同じ位置で、青山御殿はそこから西南方向へずっと行った反対側角の、現在の青山一丁目交差点のすぐ北側、赤坂御用地西門近くの広い芝生地となっている場所である。ラクダが牽かれた赤坂御本殿から青山御殿へのあいだには「赤坂御庭」が大きく広がっていて、現在は春秋の園遊会で知られる「赤坂御苑」となっている。明治時代以降に各所が大改修されているが、たとえば中心部にある現在の「中の池」は藩邸時代の「積翠池」に相当し、池の南側に架かる二本のゆるやかな反り橋「二虹梁」は同名称かつ同位置で、継承された部分も多い。

テレビのニュースなどで目にする園遊会の光景(「中の池」の西側から北側の沿道と芝生地が映されることが多い)と、ここに述べたラクダの話とは時代も環境も異なるわけだが、試みに、御庭のなかを移動する二頭のラクダの姿を想像力豊かに思い描いてみることも、意味のないことではない。少なくとも、赤坂邸でのラクダ見物の様相は、松浦静山いうところの両国広小路の「卑賤混騒」とは懸け離れた、特別の「眼福」であったことだけは間違いない。恐らくこのとき写生して描かれたと思われる、紀州藩士で画家の諏訪鵞湖による画巻(文政七年成)の存在が確認されており、瀟洒な筆致でラクダ二頭と、それを連れ歩く楽器と野菜を携えた唐人姿の男たちが美しく描かれている。

タイミングからしてこの「御親覧」は、徳川斉順がラクダと対面したい気持ちの強かったことをうかがわせ、そこで思い起こされるのは、やはり紀州和歌山の殿様で五代藩主から八代将軍となった徳川吉宗の「異国の珍獣」との関わりである。江戸にやって来た最大の「異国の珍獣」といえばゾウ(アジアゾウ)であり、これは海外の知識、文物に強い関心を持っていた吉宗が自ら注文したもので、享保十三年(一七二八)に中国船がベトナムから長崎へと舶載、江戸へ上って翌年に吉宗と対面し、しばらくのあいだ浜御殿(現、浜離宮恩賜庭園)で飼育された。斉順は同じ紀州藩主にして吉宗の玄孫であり、このラクダとの対面には伝統の先進的風儀とでもいうべきものが感じられるのである。

話の流れの都合上、後述するかたちとするが(八十一頁)、じつはラクダが江戸へやって来るための道中通行の便宜を紀州家が与えており、ラクダはいわば「紀州様の荷」として江戸へ向かっていたと考えられる記録が中山道の伏見宿に残されている。つまり、徳川斉順の「御親覧」は明確な意志のもとに少し以前から計画されたもので、興行側からしても両国の小屋がいくら「争ひ見る」状態であろうとも、斉順との対面は江戸における最優先事項の一つであったと推定されるのである。

ともあれ、文政七年秋(閏八月とは、閏の調整のために八月の翌月にもう一度繰り返す月で、ラクダ見世物開始の文政七年閏八月九日は、西暦なら一八二四年十月一日に相当する)の江戸は、文字通り貴賤上下を問わず、雌雄二頭のラクダの話題で持ち切りなのであった。画家で文人の酒井抱一は年の終わりに「歳暮」として、「御厩の駱駝に附むとしの末」(『軽挙観句藻』)と句作した。興行がどこまで続いたのか正確な終了時期ははっきりしないが、儒者の松崎慊堂がその日記である『慊堂日暦』に翌文政八年二月四日にラクダ見物したことを記すので、半年ほども続いた見世物史上空前のロングラン興行であった。